

# ◇令和5年度 南丹市学校・園自己評価書◇

## 【最終評価】 美山小学校

◎南丹市教育の指針を踏まえ、校務分掌ごとに『具体的目標』『評価指標』を設定。

◎評価については、「A・B・C・D」の4段階表記とする。(A: 十分な成果が見られた、B: 成果が見られた、C: やや課題が見られる、D: 課題が大きい)

南丹市教育の指針	令和5年度の具体的目標 (数値目標を含む)	成果	評価	課題	課題に対する次年度に向けた 改善・克服・発展策
「主体的・対話的で深い学び」の実現	児童が明らかにしたくなる課題を設定することで、学ぶことに興味・関心をもち、粘り強く取り組めるようにする。 (粘り強く、最後まで取り組む児童の姿80%以上) 教材の価値や単元でつけたい力を明確にし、教える場面と児童が考える場面をデザインするなど単元を見通した計画を考える。(計画の実行100%)	自由進度学習を高学年で教科・単元を搾って進めてきた。算数からスタートした自由進度学習も、国語、理科、社会に広がり、教科の特性を捉えながら学習を展開できるようになった。児童の学習への意欲は高まったように感じる。児童が見通しをもって、計画する力を育む一つの取組となっている。	B	学力の上位層や下位層の児童は自分の進度で学習が進められているが、中位層の児童は、どのように学習を進めればいいのか、自分自身で最適解が分からず、一人で学習を進めるだけになっている。児童同士の学び合いの時間が少なくなっている。	単元のルーブリックを児童と共有をして、身につけさせたい力を明確にするとともに、学び方や学習の仕方、非認知能力を育む視点を大切に進める。教師自身が、評価の場面の見直しをもつ。
学びのコーディネート力の向上	板書や発問で児童の学びを引き出し、児童が自分の言葉で話したくなる、友達の意見を聞きたくなる授業を実践する。(意見や考えを話したい・聞きたい児童80%) ねらいの達成に向け、考えを比較したり、問題を見いだして解決策を考えたりするために、効果的に話し合い活動を取り入れる。(話し合い活動により、新たな気づきがあった児童80%)	ペアやグループでの学び合いは楽しいについて「そう思える」67%、「ややそう思う」21%と答えた児童が多く、協働的な学びを進めることができた。 教科によっては、児童が課題を見出し、その解決策を自分たちで話し合い、学習を進めることができた。そうすることで、次時の見直しをもつことができ、主体的に学習することができた。	A	グループやペア学習では同じ児童が発表をしたり、進めたりした結果、自分の意見をよく発表していると感じる児童が30%であった。学び合いは楽しいと感じている児童の割合から考えると、「発表している」「しっかり聞いている」児童の割合が低い。効果的な話し合いの進め方、明確なねらいについてはやや課題がみられる。	効果的は話し合いの場面、児童が発表をする場面を設定しながら、さらに聞くことに意識が向けられるように声かけをする。 授業時間はもちろん、学校行事など学校生活の中で成功体験を増やすことができるように、児童が活躍できる場を設定する。
学校現場における業務改善を通じた教育の質的向上	校務サーバーによる文書管理、資料等のICTによる共有化をより一層推進し、教職員間の意思疎通を円滑にするのと同時に会議の効率化を図ることで、教職員の心理的余裕を確保する。また、地域の方と学校経営方針を共有し協力することで、児童理解や授業準備に充当できる時間を増やす。 教職員自己評価による肯定的回答80%	校務支援システムの運用や校務サーバーの活用、グループウェアの活用、文書分類の徹底などにより、校務の効率化を進めてきた。 会議の時間設定を意識することで、部としての情報共有や意見収集を適宜行い、効率化を図ることができた。 従来から慣例として行ってきた行事や取組について一層の見直しを図り、指導のねらいをより明確に焦点化するなど、改善を図ることで、業務のスリム化を推進できた。 60分プロジェクトの見守りや美山学ゲストティーチャーなど地域ボランティアの方々や取組の方針等を共有することで、教員の学級事務や教材研究の時間を一定確保することができた。	B	校務支援システムの機能拡張等により、一部の校務は負担軽減がなされるとともに、勤務実態の見え方が促進され、行動改善につながる一方で、AIドリルや校務支援システムの操作に不安がある教職員もいるため、改善を実感するに至っていない面もある。 学習指導や生徒指導上の課題対応のチーム化をより一層推進していく必要がある。	ICT活用に関して、必要に応じてミニ研修を実施し不安の解消に努めるとともに、実践例等の情報共有を進める。 また、文書分類仕分けの徹底により、一定整理はできているが、文書の簿冊等の物理的な収納スペースの確保など工夫が必要である。
事務職員の学校運営への参画	運営委員会メンバーとして、教育活動全般に対する理解を深め、年間教育計画を見直し、事務職員ならではの視点から意見する。また、学校事務の効率化・校務のシステム化による連携の強化や柔軟な発想の予算運用による教育活動の支援を通して、運営に関わる。 (参画事例の蓄積と成果の可視化)	共同学校事務室で得た情報を管理職や教職員に連携することができた。また、学校予算に関わって、ホームページや地域との協働的な活動の予算編成や予算運用に関わることができ、柔軟な予算の活用ができた。	B	学校運営上で事務職員の効果的な参画のイメージがもてず、事務職員ならではの視点から意見することがあまりできていなかった。	事務職員が学校運営に参画する方法としてまずは教育活動のねらいと予算から効率的な運営を考えていく。
生徒指導の3機能を生かした指導の充実	・報告・連絡・相談を心がけるとともに、問題事象のデータベース化などにより共有化を図り、全教職員でいじめ解決の100%を目指す。 ・不登校の背景を様々な視点から見立て、保護者、関係機関と協働しながら児童に合ったよりよい学びにつなげる指導、支援を行う。(関係機関との連携を学期に1回程度行う) ・児童の自己存在感・有用感を高めるために、学級が自分の思いや考えを素直に話すことができる「安心できる場」となるようにする。(児童アンケート等での該当項目で肯定的回答85%以上)	・児童アンケートでは、「いじめやけんかがなく安心して学校に登校している児童」が90%。 ・自分自身のいいところを知っていると肯定的に答えた児童が76%いた。 ・不登校支援の研修を通して、ケースリストの整備や運営について、教職員の意識を高め、来年度に向けて校内チーム体制で動くようとする意欲が高まった。 ・問題事象のデータベース化を進めることができた。	B	・友達のいいところを知っている児童は89%いたものの、自分のいいところを知っていると肯定的に答えた児童は学年によってばらつきがあるものの76%だった。 ・フリースクールとの対面の連携がまだ実施できていない。	・来年度に向けたクラブ活動のあり方を見直す。児童主体で考え、活動できるように、地域の方にも協力を仰ぎ、指導体制を整える。 ・担任一人で抱え込むことがなく全教職員で子どもの成長を支えていけるよう、ケースリストの更なる活用を図る。
自ら学ぼうとする意欲の向上	学校運営協議会や熟議を通して目指す児童像を共有するとともに、学校が取り組むことを整理し、「まずやってみる」姿勢を大切に進める。また、児童や教職員が各自の「好き」を伸ばし、失敗を許容しながらも成長を自覚できる機会を、授業や学校生活の中で創設する。 (保護者・児童アンケート、教職員自己評価による肯定的回答80%)	各種学力調査等の結果分析や児童の思い、教職員の勤務実態等から、教育活動全般にわたって、児童や教職員が試行錯誤できる機会を設定することができた。 60分プロジェクトや自由進度学習、児童委員会活動など、従来にない新たな枠組みの中で、地域との連携・協働により、児童の非認知能力の育成を図る工夫ができた。	A	めざしたい学校の姿に対する現状(児童の実態や教職員の意識)から、必要とされる取組のアイデアの一部は実践化されてきているが、それに対する検証や必要に応じて取組の方向性の修正などを今後進めていく必要がある。	児童の当事者意識をより一層高めていくために、年度当初に児童と教職員を交えて学校づくりに関してブレインストーミングなどのワークショップを実施するとともに、そこで出たアイデアをスピード感をもって試行して、変化を実感できる機会を早期に設けていくことで意欲の向上を図っていきたい。